制活新聞

第５号
平成２４年３月26日（月）
発行　制活編集支援室
http://www.smt.jp/thinkingtable/

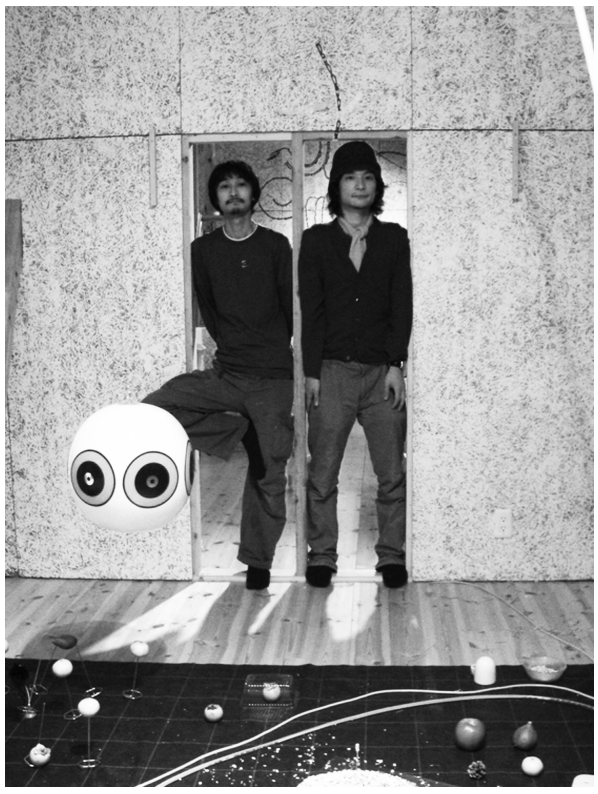
耳

第2回

「ジカンノハナ展」インタビュー!!

齋藤末度加 ×立石沙織

みなさま、こんにちは。連載「耳」は、私の耳が聞いた話、その声、その言葉を編みながら、みなさまに何かをお届けしようという、いわゆるひとつの冒険です。よろしかったら、少しの間、おつきあいくださいませ。今回お届けしますのは、齋藤末度加（まどか）さんと立石沙織さんのお話です。制活新聞の連載「ただただ思ふ」でおなじみの仙台在住のキュレーター田多知子さんが、企画をした展覧会「ジカンノハナ展」に関わりのあるお二人です。「ジカンノハナ展－Time Blossoms－」とは、２００９年11月6日～11月28日、横浜の黄金町で開催された、淺井裕介（*1）、狩野哲郎（*2）の二人展です。二人の滞在制作により、日々作品が変化していく様子を見せた展覧会で、その模様は作家、キュレーター、ボランティアの手によって、観察日記ようにブログに記録されました。そこで、ボランティアをしていたのが、齋藤末度加さん。そして、その対談相手として、齋藤さんから名前を挙げてもらったのが、立石沙織さん。作家や企画者など展覧会の作り手ではなく、受け手側のお話を通して、その展覧会の魅力を伝えてみたいと思い、お二人にお話を聞いてきました。



左）淺井裕介　　右）狩野哲郎

？私が「ジカンノハナ展」を知るきっかけとなったのは、企画をしていた田多さんから、展覧会の本をつくりたいというお話を聞いて、何かお手伝いしましょうか？と言ったところからなんです。その時は、もう展示期間は終わっていて、実際に作品は観ることはできなかったんですけど。田多さんとお話をしていくうちに、実際に、その展示が行われた場所を見てみたいと思ったんですね。田多さんに、そのお話をしたところ、齋藤さんにジカンノハナツアーをしてもらう機会をつくってもらって。会場になった黄金スタジオ、第二会場の「L－CAMP」というカフェ、第三会場のアトリエなど、黄金町界隈を案内してもらいました。そのジカンノハナツアーが私の中ではすごく心に残って。田多さんから、展覧会のことを丁寧に説明してもらい、なんて素敵な展覧会だったんだろうと想像はしていたけれど、さらに、案内してくれた齋藤さんから、「すごく素敵だったんです！」という気持ちが全身から溢れていて、そういう人がいることが、その展覧会が本当に良かったことの証明だなと思って。旅の報告でも、田多さんにその話はしていたんですが、そういう経緯もあったので、今回のインタビューで、まずは齋藤さんに話を聞きたいと思いました。対談という形にしたかったので、齋藤さんに対談したい人を聞いてみたら、立石さんのお名前が出てきたんです。お二人ともWEBアートマガジンのピーラー（*3）にこの展覧会の記事を書いたという共通点もあったということで、お話をうかがうことに決めさせてもらいました。

齋藤）以下、さ）展示期間中に、直接会ったことはなかったのですが、ピーラーにコンスタントに良い記事を書いている人がいる、それが立石さんだということは知っていて。

立石）以下、た）私も、ピーラーを通して齋藤さんのお名前は知っていて。

さ）共通の知り合いの作家さんから、立石さんのことをいろいろ聞いたりして、誰かを媒介にお互いの情報は知っていたけど、ちゃんとお話するのは、今回が初めて。さ、た）よろしくお願いします！

？まず、この展覧会を知るきっかけを教えてください。

さ）私は、アートボランティアをいろいろとやっていたんですけど、ネットTAM（*4）を見て、直感でピンときたところに行っていました。ジカンノハナというタイトルを見て、これはもしや…「モモ」かな？って、ピンときた。その時は、淺井さんも狩野さんも全然知らなかったんです。ジカンノハナブログでDMを見て、いい絵だなと思って。展覧会の概要もいいなあと思って、ボランティアに申し込みました。

た）前から淺井さんのことは知っていたのと、もともと、黄金町エリアのスタジオには出入りしていたこともあって、一鑑賞者として関わりました。淺井さんとの出会いは、まだ大学生で静岡にいた頃のこと、みかんぐみの曽我部さん宅で開催された、オープンハウス展という展覧会でした。大学の先輩であるL－PACK（*5）とか、淺井さんとか何人かで、電車に乗って会場に向かっていたんですけど、その電車の中で、淺井さんがおもむろに自分の足に絵を描きだしていて、なんだかすごい人だなという印象でした。そのオープンハウス展が、自分にとって、現代アートとの最初の出会いでもあった気がするんですけど。そこで、淺井さんの作品が好きになりました。それから、淺井さんの活動は気にしていて、今度は黄金町で展示をやるらしいと聞いて。

さ）ピーラーにはいつ頃から書いているんですか？

た）２００８年の６月から。ピーラーの主宰者の方に会った時に、アートに関わりたいという話をしていたら、ピーラーに書いてみる？という話になって。第一回目の記事が中崎さんについてなんですよ。中崎さんの個展（*6）（笑）

？つながってる！おもしろい～。齋藤さんは、ピーラーに書いたのはジカンノハナがはじめて？

さ）初めてだけど、ピーラーの存在は前から知っていて。田多さんもピーラーに書いていることを知って、ボランティアの説明会の時にピーラーについて質問したりしていました。田多さんからも、誰にでも書けるよ、連絡を取ってみたら？と言われて。ジカンノハナ展のことを、残しておけるなら、残しておきたいと思って、連絡してみたんです。

？お二人にとって、ジカンノハナ展はどういうものだったかを聞いてみたいのですが、開催された頃と、現在から振り返ってみて、両方聞かせてもらえたら。

さ）私は搬出までいたんです。搬出の半分くらいはダウンしていて、ほぼ寝ていたんですけど（笑）。第三会場のアトリエで一泊させてもらって、次の日はバイトがあったので、朝早くに慌ただしく別れたんですけど、なんとなくその時だけは、田多さんや作家さんにまた会える気がするという、私にしてはめずらしい余韻があった。それまでは、イベントなり何かが終わると、関係者の人たちとの縁もなくなっていたんだけど。終わったというさみしさもあったけど、なぜか終わっていないという感じがした。

？田多さんから、「一度として同じ時がない展覧会」と聞いて、すごくおもしろいと思ったんです。そんな話を聞いたことがなかったし。そこには、いきいきと育ち続けている時間があったんだろうなと思って。期間が決まっているから、展覧会自体は終わってしまうけど、そういう内容の展示だったから余韻が残ったのかな。

さ）その後の他の展覧会で、淺井さんの作品を見たりしましたけど、やっぱりその期間で終わって完結しているんですよ。ジカンノハナ展は、展示が始まるときも、ここから明確に始まるというのではなくて、徐々に始まる感じがあったんじゃないかと思う。

？確かに、花って急には咲かないし、まずは種から芽が出て、育っていって、花びらも一枚一枚開いていったりするし。

さ）終わるっていうのは枯れちゃうことかもしれないけど、それで終わりじゃないから。道を歩いていて、どこから山が始まるのかわからないけど、山の終わりもわからない。展覧会という箱をつくって、始まりと終わりを設定するという境界をつくるのではなくて、始まりも終わりもわからない山のような感じ。この展覧会は、私にはそういうイメージ。今は…、もう2年も経っていて、この間、本も完成したんだけど。

「今ここでつくったものと過去のドローイング」淺井裕介

？展覧会から時間も経ったけど、その間に、齋藤さんは本づくりにも関わりつつ、今から振り返るとどうですか？

さ）今は、なんだか嘘のようで。あの時間が、確かにあったんだけど。私は、あの展覧会で人生が変わってしまったんですよ。旦那さんにも出会ったし（笑）思い返すとつくづく不思議だなって思う。ジカンノハナ展から、いろんなものが今につながっている。田多さんにも、淺井さんにも出会ってなかったら、結婚していないですよ（笑）あかべえ（インタビュアー・アベのあだ名）にも出会ってなかったし。ジカンノハナがつないでくれた縁であかべえともあるよね。その場にいなかったのに、つないじゃった人がいるというそのすごさ。あの時の本当に幸せな時間が、いい意味で嘘のようって思う。

た）私にとっても、重要な展覧会だったと思っています。大学ではアートマネジメントを専攻していて、日本画や、仏像、洋画の展覧会を見て感想を書くということも授業の中でしていました。それまで見てきた展覧会は、完成された作品が展示空間に並んで完結しているケースが多かったんですけど、齋藤さんも言っていましたが、ジカンノハナには完成がない。ずっとその期間中、変化し続ける展覧会というのが、ジカンノハナ展がはじめてだったので、衝撃的でした。自分の中での展覧会と概念が崩されたというか。そういう意味で、重要な展覧会だったと思っています。ピーラーの記事の中でも書いているんですけど、淺井さんが言ってくれた言葉が核心をついているなと思っていて、「滞在型の作品で、最後に作品のピークがくるのに違和感をもっていた」というその言葉を受けて、また作品を見てみたときに、ジカンノハナ展にはピークというものがないということに気づかされました、一年という月日を一緒に過ごしている、生活しているという感覚なんです。その新鮮だったというのが一番の印象でしたね。それから、いろいろな作家と出会って、もう一度振り返ってみると、作家が作品をつくるというのは、今ある問題もしくはそこまで問題にされているわけじゃなくても日常の中でささくれ立っている事柄を表面化する役割があるんだなって。そして表面化するということが、種を蒔くことに近いなと思うんです。淺井さんと狩野さんは、たまたま横浜という場所に人生の中でたどりついて、二人で同じ時間を共有して、その時間を通して、そこにジカンノハナの種を蒔いていったんだなという感じ。だから、展覧会というその瞬間で感じたこともたくさんあったけど、種から芽が出るまで時間がかかるように、ゆっくり何かそこから成長するものがある気がして、それが（今日みたいな）こういう出会いにつながっているのかなと。そういうことは、実は他の展覧会でも起こりうること。ただそれになかなか気づきにくいだけで。ジカンノハナ展は、こういう出会いまで含めた展示だったのかなって。淺井さんと狩野さんは意識していないだろうけど、二人の化学反応が必然的に生んでしまうというか。そういう魅力があったように思います。

？今まで見てきた他の展示と比較してみて、ジカンノハナ展の特徴はどんなところにあると思いますか？

さ）私は、美術大学に行っていたので、いろいろ展覧会は見ていたんですけど、最初にこの展示を見たとき、これでいいんだという、ちょっと解放された感じがありました。他の学校はわからないけど、私が通っていた大学の美術教育は本当に古典的で、キャンバスに向かって油絵を描く子がほとんどで、作品が社会に対して、何かを言及していなくてはいけないとか、そういうことを刷り込まれていたんです。淺井さんみたいに、ただ描くことが好きで、描きたいから描くという衝動を大事にしていて、その衝動で生まれたものが、目が見えれば美しいというも

田多知子氏の耳

---

1 淺井裕介
…１９８１年東京生まれ。絵描き。テープ、ペン、埃、土、水など身の回りの素材を使った作品を多く発表。

*2 狩野哲郎
…１９８０年宮城県仙台市生まれ。美術作家。自然物と既製品を組み合わせたインスタレーション、ドローイング、写真などを使ったサイトスペシフィックな作品を多く制作。

*3 ピーラー
…藤田千彩、野田利也運営による、WEBアートマガジン。全国に散らばる美術館やギャラリー、アーティストの情報、世界の片隅で起こっているアートの事件、それらを、発信し、記録し「アートを伝える」ことを目的にしている。
http://www.peeler.jp/

*4 ネットTAM
…トヨタが企業メセナ協議会と連携して運営する、アートマネジメントに関する総合情報サイト。

*5 L－PACK
…小田桐奨、中嶋哲矢によるカフェユニット。バックパックに詰めたカフェを様々な場所で開封し、「コーヒーのある風景」をつくりだす。ジカンノハナ展で第二会場となったカフェ「L－CAMP」を営業していた。展示期間中には、「珈琲ノジカン」と題して、黄金スタジオで出張カフェを行った。

*6 中崎さんの個展
…「キロ／重いのか遠いのか速いのか、分かれ道、もしくはウチに帰るのか」。ArtCenterOngoingにて２００９年４月に開催。立石さんのレビュー
http://www.peeler.jp/review/0904tokyo/index.html